

IV 図工 2年次の成果と課題

1. 成果

(1) 造形的な「見方・考え方」を働かせて、表したいことと表現を往還しながら作品づくりに取り組むことができる授業づくり

2年次の研究では、作品づくりを終えた後に省察するだけではなく、省察しながら作品づくりに取り組む子どもの姿を目指した。そのためには、表したいことをはっきりとすることが必要である。また、表したいことが効果的に表現できているかどうかを判断する規準をもつ必要がある。その規準が造形的な「見方・考え方」である。造形的な「見方・考え方」の働かせ方は一人一人の表したいことによって異なる。

前年度の研究で、他者評価によって得られるフィードバックは、自分の表現が効果的に表れているかどうかを客観的に知るための有効な手段になることをつかんだ。そこで、作品づくりに取りかかる前の段階に鑑賞活動を設け、奥行きを表す「見方・考え方」の効果について確認し合う場を設けた。この奥行きを表す「見方・考え方」が共通の規準として働くことでお互いに助言し合えるのではないかと考えた。

省察しながら作品づくりに取り組む手立てとして、構想図をつくる段階でグループで省察し合う場を設けた。子どもたちは、奥行きを表すための「見方・考え方」を働かせながら「もっと極端に大きさを变えることでより表したいことが伝わるのではないか」「だんだんと大きくすることでより動いている感じが出せるのではないかなどと助言し合った。この活動を通して、自分の表したいことをはっきりとさせたり、自分の表したいことを伝えたりするためにはどのように表現していけばよいのか見通しをもつことができた。そのことが試行錯誤しながら表したいイメージに近付けていくことに有効に働いたものと考えた。また、表したいことを共有できているために、作品づくりの段階でも自然発生的にお互いに協働的に省察しながら作品づくりに取り組む姿が見られた。

(2) 自分の表したいことを伝えるために、効果的な表し方を選択したり生み出したりするための手立て

子どもたちは、2年生で絵の具を泡にして表す方法を学んでいる。また、4年生では、ストローやビー玉、ぼかし網と歯ブラシを用いて表す方法など多様な表現方法を学んでいる。しかしながら、これらの表現用法は特定の題材で用いられ、その他の題材では用いられることがほとんどなかった。表現方法が先にあるのではなく、表したいことを効果的に表現するために様々な表現方法があるのだということを子どもたちにつかませたいと考えた。例えば、低学年で体験した泡を活用した表し方は、珊瑚の海を表したり宇宙の銀河を表したりすることができるなど、高学年でも効果的に活用できるものである。

そこで、これまでに学んだ様々な表現方法とそれらがどのような場面にいることができるのかを提示することで、これまでに学んだ表現方法を自分の表したいことに合わせて選択できるようにした。

子どもたちは、自分の表したいことに合わせて、これまで学んだ表現方法のうちのどれが効果的なのかを選択し、試行錯誤しながら作品づくりに取り組んだ。また、様々な表現方法を組み合わせることでより効果的な表し方を生み出す様子も見られた。

2. 課題

(1) 子ども自身が自分の学びを自覚し構想を練っていくための教師の支援

図画工作科における自律的な学習者の姿を自分の表したいことを造形的な「見方・考え方」を働かせながら主体的に表現していくことと考えた。しかし、資質・能力を高めていくためには、自分の学びを自覚することが必要である。図画工作科は系統性に関する研究面が弱い教科である。そのために、創造的な技能は自覚的に繰り返し使わなければ向上していかない。また、思考や表現は次々と変容していくために、学びの過程を捉えにくいという特質がある。

そのために、これまでの学びを振り返って、これからの学びにどのような「見方・考え方」や創造的な技能などを活用して作品をつくっていくのかの見通しをもつ(構想の段階)、どのようにして表したいことを効果的に表現したのか、表したいことが変容していったのか(作品づくりの段階)、作品づくりを通してどのような力が付いたのか、どのようなことに気付いたのか(作品づくりを通して振り返る段階)を自覚することができるシートの開発と指導の工夫が必要である。

(2) 一人一人の表したいこと、表し方に応じるための教師の支援

自律的な学習が進むほどに発想・構想面、創造的な技能面などの多様性は大きくなる。また、造形的な「見方・考え方」は表したいことによって一人一人異なる。前提として、創造的な技能でも「見方・考え方」でも、知らなければ活用はできない。そこで、鑑賞活動を通して、発想の手がかりをつかんだり、表現方法を知ったり、造形的な「見方・考え方」を見いだしたりすることが必要となる。これまで以上に鑑賞活動の題材における位置付けと在り方が重要となってくる。

子どもの表したいことや表し方が多様になればなるほど教師は一人一人の実態を細やかに把握しなければいけない。そのために、子どもが学びを自覚するためのシートを教師と子どもが共有していくことが必要になってくると考える。また、教師一人で全員の子どもの見取ることは難しい。子ども同士が造形的な「見方・考え方」を働かせながら学び合えるように育てていきたい。

